

# 千駄木谷中界隈を歩いてみませんか

閑静な住宅街からどこか懐かしさを感じる街の賑わいまで、様々な顔を持つ本駒込から根岸の地域。江戸時代には、中山道を通じて江戸市中への入り口でもありました。明治に入ると、東京大学や東京美術学校にも近いこの地域は、森鷗外や夏目漱石を始めとした文豪や、岡倉天心や朝倉文夫などの芸術家も集う街となりました。

今回は、江戸時代の大名屋敷や寺院の雰囲気を感じる文化財のほか、明治の文化人の暮らしを垣間見ることのできる文化財めぐりコースを御紹介します。

東京都



六義園

## 公開情報

### 六義園

公開日 通年（12月29日～1月1日を除く。）  
 公開時間 9:00～17:00（入園は16:30まで）  
 料金 一般 300円・65歳以上 150円

### 善源寺

安井息軒墓  
 西村茂樹墓

公開日 通年  
 公開時間 9:00～17:00  
 料金 なし

### 旧安田楠雄邸庭園

公開日 水曜・土曜（イベント時連続公開あり）  
 公開時間 10:30～16:00（入館は15:00まで）  
 料金 500円

### 森鷗外記念館

森鷗外遺跡

公開日 通年（毎月第4火曜・年末年始・展示替期間・燻蒸期間を除く。）  
 公開時間 10:00～18:00  
 料金 なし（展覧会観覧料は有料）

### 岡倉天心記念公園

岡倉天心宅跡・  
 旧前期日本美術院跡

公開日 通年  
 公開時間 終日  
 料金 なし

### 朝倉彫塑館

旧朝倉文夫氏庭園

台東区立朝倉彫塑館住居  
 台東区立朝倉彫塑館アトリエ棟  
 台東区立朝倉彫塑館旧アトリエ  
 台東区立朝倉彫塑館東屋

公開日 通年（月・木曜（祝日又は振替休日の場合は翌日）・年末年始・特別整理期間を除く。）  
 公開時間 9:30～16:30（入館は16:00まで）  
 料金 一般:500円 児童・生徒:250円（20名以上の団体はそれぞれ300円・150円）



### 延命院のシイ

公開日 通年  
 公開時間 7:00～15:30  
 料金 なし

### 天王寺五重塔跡

公開日 通年  
 公開時間 終日  
 料金 なし

### 子規庵

公開日 通年（月曜を除く。）夏休み・冬休みあり  
 公開時間 10:30～16:00（12:00～13:00を除く。）  
 料金 500円（中学生以下無料）

### 中村不折旧宅（書道博物館）

公開日 通年（月曜（祝日又は振替休日の場合は翌日）・年末年始・特別整理期間を除く。）  
 公開時間 9:30～16:30（入館は16:00まで）  
 料金 一般:500円 児童・生徒:250円（20名以上の団体はそれぞれ300円・150円）

〒163-8001 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号  
 電話:03(5321)1111(代)  
 教育庁地域教育支援部管理課





## 谷中・千駄木界隈を歩こう

江戸時代、将軍の居城を中心に百万都市として発展を遂げた江戸は、大火や地震が起きると武家地や寺社の配置替を行い膨張していきました。公式な江戸の範囲は文政元年（1818）の「江戸朱引図」により町奉行・寺社奉行の管轄範囲が定まることで初めて決まりました。江戸城から見てほぼ真北に当たる本駒込・千駄木・谷中・西日暮里・根岸は、江戸市中から市外へとになっていく多様な地域的特性を有しています。

現在の駒込駅から千駄木の森鷗外の旧宅（都指定旧跡：森鷗外遺跡）までの地域は、中山道から分岐する日光御成道（本郷通り）に沿った地域が中心です。本郷三丁目交差点にある「かねやす」（江戸時代に、「本郷もかねやすまでは江戸のうち」という川柳で有名になった商店）から北へ向かい、前田家上屋敷や水戸徳川家中屋敷（ともに現在の東京大学）を過ぎると、駒込の寺社地や農村地域になっていきますが、中山道沿いの武家地からつながる柳沢家下

屋敷（国指定特別名勝：六義園）などの大名屋敷も点在します。このあたりは比較的平坦地で、不忍池へつながる谷戸川により浸食された谷に臨む武蔵野台地東端の台地上を歩くこととなります。森鷗外の旧宅はこの台地端上に建ち、東京湾も望めたことから「観潮楼」と名付けられています。

森鷗外旧宅から団子坂を下り、谷中銀座から「夕焼けだんだん」を登ると、東京低地を望む細長い台地上に出ます。江戸時代には寛永寺や天王寺などの寺院が立ち並んだ場所で、同じ台地上の旧朝倉文夫邸（現・朝倉彫塑館）も眺望が良かったものと思われます。旧朝倉文夫邸や谷中霊園から御殿坂などの坂を下ると東京の低地部で、こちらは江戸時代には農村地帯でした。今回のコースは子規庵などの低地の史跡がゴールとなります。起伏に富んだ東京の台地部を歩いて、多様に富んだ新しい東京の一面を感じてみてください。



## 六義園

国指定特別名勝

昭和 15 年 8 月 30 日名勝指定  
昭和 28 年 3 月 31 日特別名勝指定  
平成 12 年 9 月 6 日追加指定

六義園は、元禄 15 年（1702）に 5 代将軍徳川綱吉の側用人から老中格にまで出世した柳沢吉保が、綱吉から拝領した下屋敷に完成させた大名庭園です。多忙のためなかなか江戸城を離れられなかった吉保は作庭中の図面を届けさせ、自ら指示を出したほど熱心であったといわれています。

庭園は大泉水を中心とする回遊式築山泉水庭園として作庭されました。この形式の庭園では、中の島を有する池を中心に園路を巡り、その景色を楽しむことができます。

吉保は古典に造詣が深く、六義園の作庭にもその思想が取り入れられています。『万葉集』や『古今和歌集』の名歌に由来する景色を選び、八十八景として六義園の中に作り出しました。

例えば、八十八景の中には紀州の名勝地で多くの詩歌に詠まれた「和歌の浦」に由来する「出汐湊」や「片男波」などがあり、江戸にいながらその美景を楽しみ古典の世界に遊ぶことができるような作庭となっています。

六義園は明治維新後には、岩崎彌太郎の別邸となります。幕末の混乱で荒廃した庭には「つつじ茶屋」、熱海から移築した「熱海茶屋」などの整備がなされました。その後、昭和 13 年（1938）に岩崎家から東京市に寄付され都立公園として一般に公開されるようになります。

広大な庭園では四季折々の花や緑を楽しむことができます。シダレザクラは昭和 30 年代に植栽されたものですが、今では春の六義園を代表する景観となっています。その他にも駒込染井村とも縁の深いツツジ、アジサイ、紅葉など見どころは尽きません。



水木家旧蔵六義園絵図



出汐湊から中の島を望む

## 安井息軒墓

都指定史跡

昭和 31 年 3 月 3 日指定

安井息軒（1799-1876）は、江戸時代後期から幕末にかけて活躍した儒学者です。近代漢学の礎を築き、幕末・明治に活躍した谷干城や陸奥宗光ら多くの門人を育てたことでも知られています。

息軒は日向（宮崎県）飫肥藩伊東家の藩士の家に生まれ、大坂や江戸で学を修めた後、藩校「振徳堂」で教鞭を取るかたわら藩政にも参画しました。郷里宮崎の邸宅跡は現在、国史跡「安井息軒旧宅」として指定されています。

その後麹町二番町に居を移し、天保 10 年（1839）には私塾「三計塾」を開きました。私塾の名のもととなった「三計」とは「一日の計は朝にあり。一年の計は春（元旦）にあり。一生の計は少壯の時にあり」という「塾記」（設立趣旨）の文言によっています。幕末文久 2 年（1862）には、幕府に招かれて昌平黌の儒官となっています。

明治 9 年（1876）、77 歳で逝去。墓碑の篆額「安井息軒先生碑銘」は清国の江蘇省按察使（司法長官）應寶時の筆、撰文は門弟川田颯江、書丹は日下部鳴鶴、鐫刻は谷中の石工廣群鶴です。

なお、息軒の夫人佐代は、森鷗外の小説『安井夫人』のモデルになったことでも知られています。



安井息軒墓

## 西村茂樹墓

都指定史跡

昭和 9 年 5 月 16 日標識  
昭和 27 年 4 月 1 日史跡指定  
昭和 30 年 3 月 28 日旧跡指定  
昭和 39 年 4 月 28 日種別変更

西村茂樹（1828-1902）は、幕末～明治時代に活躍した思想家です。下総佐倉藩（千葉県）の支藩である佐野藩堀田家の藩士の家に生まれ、天保 14 年（1843）に佐倉藩が藩校である成徳書院に招聘した安井息軒から儒学を学んだほか、洋学、砲術を佐久間象山らに学んでいます。

明治になると啓蒙活動に加わり、森有礼、福沢諭吉らとともに日本の近代化に大きな役割を果たした学術団体「明六社」の設立に主導的な役割を果たしました。その後、文部官僚として教科書の編集や教育制度の確立に尽力し、明治 12 年（1879）からは日本最初の本格的百科事典である『古事類苑』の編纂事業を指導しています。

一方で、伝統的な日本道徳の高揚に努め、『日本道徳論』などを著すとともに、東京修身学社（日本弘道会）を設立しました。晩年は宮中顧問官、貴族院議員などを務めています。

明治 35 年 8 月 18 日、75 歳で死去。墓碑には「西村泊翁先生墓」（泊翁は号）とあります。



西村茂樹墓

## 旧安田楠雄邸庭園

都指定名勝  
平成 10 年 3 月 13 日指定

本郷台地の端部、この地に藤田好三郎（実業家、「豊島園」の創始者）が木造 2 階建の住宅を構えたのは大正 8 年（1919）。その後、関東大震災で被災した安田善四郎（保善銀行取締役、初代安田善次郎の娘婿）が大正 12 年に購入し、昭和 12 年（1937）、安田善四郎の長男楠雄が相続しました。平成 7 年（1995）に安田楠雄が逝去すると、建物の大半と敷地は公益財団法人日本ナショナルトラストに寄贈され、公開・活用が図られています。

東西に細長く、本郷台地の崖線に直交する敷地には、玄関から応接間（東棟）、残月の間など客間（中央棟）、台所を始めとする生活空間（西棟）が雁行式に配置されています。また、中央棟の二階にある客間は、本邸で最も格式が高い書院造りになっています。



枯流れからサンルームを望む

大きく見せる効果もあります。

両岸に大振りの護岸石組を配し、左右に蛇行する枯流れは、庭のほぼ中央に置かれた景石により建造物側に大きく回り込み、溜りを形成しています。残月の間から、この川溜りと景石越しに多層塔と組井桁を眺めるのが、本庭園の主景です。また、サンルームからは、川溜りが景石を中心とした池泉のように見え、藤田好三郎が植えたカシワと六角形石燈籠が左右に添えられます。鑑賞する部屋ごとに多彩な景を楽しむことができるのも、本庭園の特長です。

台地端部の地形を巧みに利用した宏壮な庭園は、大正時代から昭和初期の東京山手の高級住宅に伴うものとして、往時の姿をほぼそのまま現在に伝えています。

※ 2016 年 11 月下旬～12 月上旬の土曜日（祝日の場合は開館し、翌日休館）、年末年始（12 月 29 日～1 月 3 日）、及び展示替期間、燻蒸期間等



残月の間から観た主庭

## 森鷗外遺跡

都指定旧跡  
昭和 25 年 9 月 9 日標識  
昭和 27 年 4 月 1 日史跡指定  
昭和 30 年 3 月 28 日旧跡指定

ドイツから帰国後、訳詩集「於母影」（小金井喜美子らと共訳）やドイツ三部作などにより当時の文学界に新風を吹き込んだ森鷗外が、この地に転居してきたのは明治 25 年（1892）1 月。当時、開業医であった父静男が廃業し、森鷗外と同居するために購入したもので、その後敷地を拡張し、二階を増築します。階上から浜離宮の木立の上に品川沖の白帆を眺めることができたことにちなみ、屋敷は「観潮楼」と名付けられました。

約 320 坪の屋敷地のほぼ中央にあった観潮楼は、居間や洋間など、各部屋が複雑に入り組んだ廊下によって結ばれていました。当時の表門は藪下通りに面しており、団子坂を上りきった通りには、裏玄関まで長い石畳が続く裏門がありました。西側の敷地境にはシイが植えられ、敷地の半分を庭が占めるなど、自然味あふれた邸宅であったことがうかがえます。

明治 29 年に創刊された『めざまし草』の編集をはじめ、幸田露伴や斎藤緑雨による文芸批評「三人冗語」、饗庭壺村、尾崎紅葉、森田忠軒を加えた好評「雲中語」など、観潮楼は森鷗外の文筆活動の拠点でした。明治 40 年から明治 43 年までは観潮楼歌会が定期的に催され、与謝野鉄幹、伊藤左千夫、佐佐木信綱、斎藤茂吉ら多くの歌人が邸宅を訪問しています。

森鷗外が没した大正 11 年（1922）以降、しばらくは家族が生活をしていましたが、その後借家となり、昭和 12 年（1937）には失火により母屋の大部分を焼失。昭和 20 年の戦災で建物全てが消失しました。藪下通り沿いの敷石一部と門柱礎石、玄関左手に植えられていた大イチョウ、そして幸田露伴、斎藤緑雨との記念撮影で、森鷗外が座した大石（通称「三人冗語の石」）が、往時の姿を今に伝えています。

昭和 24 年に高橋誠一郎（当時、国立博物館館長）を中心とした鷗外記念館準備委員会が発足し、文京区が敷地を購入します。翌 25 年には東京都教育委員会による『近代文化人の遺跡調査』を受け、「森鷗外遺跡」として史跡に標識されました。

昭和 37 年（1962）、文京区立鷗外記念館本郷図書館が開館、平成 24 年（2012）には文京区立森鷗外記念館としてリニューアルオープンしました。自筆の書簡や原稿、遺品などの展示史料を通じて、森鷗外の遺業を偲ぶことができます。



旧観潮楼表門跡



森鷗外記念館と大イチョウ

### 森鷗外記念館

開館時間 10:00～18:00（最終入館は 17:30）  
休館日 毎月第 4 火曜日（祝日の場合は開館し、翌日休館）、  
年末年始（12 月 29 日～1 月 3 日）、及び展示替期間、燻蒸期間等  
観覧料 一般：通常展 300 円 20 名以上の団体：240 円  
中学生以下・障がい者手帳提示の父と同伴者  
1 名まで：無料 ※特別展は内容により異なる。

## コラム 森鷗外と二人の人類学者

陸軍軍医であり、翻訳家、小説家、評論家として多端な活躍をした森鷗外は晩年、帝室博物館総長兼図書頭に就任し、帝室博物館（現、東京国立博物館）への出勤や、正倉院宝物の曝涼（虫干し）に立ち会っています。

また、大正8年（1919）には帝国美術院（現、日本芸術院）の初代院長に就任するなど、歴史学者や芸術家とも盛んに交流しています。ところで、森鷗外が人類学者と親交があったことは御存知でしょうか？

一人は東京帝国大学医科大学教授の小金井良精で、東京医学校時代の森鷗外の先輩に当たります。小金井良精は明治21年（1888）、森鷗外の妹喜美子と再婚し、義弟となりました。当時家長であった森鷗外は、この結婚の可否について“*Le consentement sans reserve.*”（無条件で同意）と留学先のベルリンから電報を打っています。

結婚前後から翻訳や歌人として活動していた小金井喜美子は、明治22年（1889）、小金井良精の北海道アイヌ調査に同行し、その時の経験を「島めぐり」として『しがらみ草紙』に発表しました。この紀行文は、後に小金井良精の論文集『人類学研究』にも再録されています。

森鷗外は、駒込片町にあった小金井家に年賀の挨拶を欠かさなかったほか、刊行したばかりの著書を自ら届けるなど、足繁く訪れています。また、明治37年（1904）に開戦した日露戦争では、上陸した遼東半島で発掘された古墳人骨を小金井良精に寄贈するなど、研究面での協力も惜しみませんでした。

小金井良精の代表的な研究は、こうした出土人骨の計測により、日本石器時代人がアイヌであることを主張したものです。これは、東京帝国大学理科大学教授で人類学者の坪井正五郎が、出土遺物や口伝などからコロボックル（アイヌ語で「蔭の葉の下の人」を意味する伝説上の小人）説を主張していたことに対する、解剖学者としての反論でした。そして、森鷗外と関係のあったもう一人の人類学者こそ、小金井良精の論敵であった坪井正五郎なのです。

面白いことに、森鷗外と坪井正五郎の接点は、観潮楼でも東京帝国大学でもなく、三越呉服店にあります。明治38年（1905）、三越呉服店の『デパートメントストア宣言』と同時に流行会が組織され、テーマを設けた意見交換や懸賞図案の審査が行われます。これは、専務取締役であった日々翁助の『学俗協同』という理念によるもので、流行会での意見を参考に商品化が行われ、三越の流行が作られていきました。森鷗外は明治43年（1910）から流行会に参加し、PR誌「三越」に小説「流行」などを発表しています。

一方の坪井正五郎は、流行会やその後新設された児童用品研究会に参加し、プーメランを改良した『飛んで来い』や江戸時代の玩具『ずぼんぼ』を復活させるなど、ヒット商品を次々と提案していきました。



観潮楼門前にて 愛馬と鷗外

鷗外日記には、流行会で坪井正五郎の帰朝報告（欧米漫遊談）を聞いたことなどが記されています。森鷗外と二人の人類学者の関係から、当時の知識人の旺盛な探究心が垣間見えます。



小金井良精・喜美子夫妻 ©個人蔵



## 岡倉天心宅跡・旧前期日本美術院跡

都指定旧跡

昭和27年11月3日史跡指定  
昭和30年3月28日旧跡指定  
昭和35年4月1日名称変更  
昭和44年3月27日名称変更

岡倉天心記念公園と名付けられたこの地に、日本美術院が開院したのは明治31年（1898）10月15日。日本美術院は、岡倉天心を中心に、日本美術と各自作家の特長を織り込みながら、その発達応用を自在に得ることを目的に創設された美術研究団体です。橋本雅邦を主幹に、評議員に横山大観、菱田春草、六角紫氷らが名前を連ねています。

日本美術蒐集家のW. ビゲローらの寄付によって建てられた木造瓦葺二階建ての建物は、二棟が南北に向かい合っていました。北棟には事務室、工芸研究室、集会室があり、南棟は絵画研究室に充てられました。敷地内には付属工場が9棟建てられ、絵画、彫刻、漆工、図案、金工などの研究や製作が行われました。

明治31年（1898）10月15日の落成式に併せ、第5回日本絵画協会第1回日本美術院連合絵画共進会が開催、横山大観「屈原」などが出品されました。以降、日本美術院では美術や美術工芸の制作、展覧会の開催、機関誌『日本美術』の発行などを精力的に行います。しかし、日本美術院は次第に経営に行き詰まり、岡倉天心が明治38年にポストン美術館中国・日本美術部部长に就任し渡米したことから解散状態となります。翌年には敷地を3000円で売却し、それを元に茨城県五浦に移転、谷中の日本美術院はここに終焉を迎えました。



岡倉天心像

現在の岡倉天心記念公園は、昭和42年（1967）、台東区により開園されました。園内には五浦の六角堂を模した記念堂が建てられ、内部に岡倉天心の胸像が安置されています。この胸像は、平藤田中が昭和6年に制作した作品（東京藝術大学構内に展示）の原型から鋳造されたものです。

日本美術院院歌にある一節、「谷中うぐいす初音の血に染む 紅梅花 堂々男子は死んでもよい」という、明治期に新たな日本美術を模索し続けた画家達の気概を今に伝えていきます。

## コラム 谷中八軒屋

日本美術院が開院した明治30年代の谷中は、一面田圃の広がる自然豊かな郊外でした。明治31年10月、日本美術院の道路を隔てた向かいに、形も大きさも全く同じ、茅葺二階建ての風変わりな建物「八軒、突如姿を現しました。これは日本美術院の中心メンバーであった横山大観、下村観山、菱田春草、西郷孤月、寺崎廣葉、小堀鞆斎、岡部覚彌、剣持忠四郎の8人と、その家族が住んでいたもので、通称「谷中八軒屋」と呼ばれました。

困窮を極めた生活だったようですが、横山大観が夜更けに戸を叩いたところが下村観山の自宅で、夫人に注意されたことなど、エピソードには事欠かなくなりました。この八軒屋での喜劇的な生活もまた、茨城県五浦への移住により幕を閉じました。



谷中八軒屋

## 旧朝倉文夫氏庭園

国指定名勝  
平成20年3月28日指定

朝倉文夫は芸術を「自然と人生の象徴形」ととらえていたため、自ら設計した居宅の中でも庭と建物の一体感を大切にし、その思想が反映されています。

細長い敷地にアトリエと居住棟が建てられ、その真ん中に中庭を配しています。中庭は南北10m、東西14mの小さな空間で、中央に大型の池を配し、庭のほとんどが水面に占められています。随所に配置されている巨石は小さな中庭の中で存在感を放っています。

庭に面した建物の廊下には段差を設け、視点が上下することで様々な庭の様子を楽しめるように工夫されています。中庭であるため視点が外に逃げるのがなく、ゆっくりと庭を眺めることができます。

鉄筋コンクリート造の新アトリエ棟には、屋上庭園が造られています。ピワやオリーブが植えられ、かつては中央に温室がありました。昭和初期に作られた屋上庭園は斬新なものでした。この屋上で朝倉は朝倉彫塑塾の塾生と共に野菜を育てていました。園芸と自然に親しむことで芸術に必要な感性を育てるという目的があったそうです。



屋上庭園 ©朝倉彫塑館

## 台東区立朝倉彫塑館住居

国登録有形文化財(建造物)  
平成13年10月12日登録

住居棟は、木造棧瓦葺の数寄屋風意匠の和風建築で、中庭を囲むコの字型平面です。中庭は水で満たされ、水面・景石・四季の花木で豊かに彩られた和風庭園となっています。

建物配置は、北側を家族の居室とし、東側玄関と西側応接室を南側渡廊下で繋がります。玄関は旧アトリエと、応接室はアトリエ棟にそれぞれ隣接するので、建物全体に複雑な回遊性が生まれています。

居室南側の庇は軒の出が深く、互いの視線を遮りつつも、室ごとに異なる景色を楽しめるよう工夫されています。南側は玄関と応接間を繋ぐ長い渡廊下で、歩くにつれて変化する景観を感じることができます。



中庭 ©朝倉彫塑館

## 台東区立朝倉彫塑館アトリエ棟

国登録有形文化財(建造物)  
平成13年10月12日登録

朝倉文夫は昭和2年(1927)に「朝倉彫塑塾」を開設し、後進の育成に当たります。昭和10年竣工のアトリエ棟は、朝倉が亡くな



蘭の間 ©朝倉彫塑館



豚の噴泉 ©朝倉彫塑館

る昭和39年まで自らの創作活動と後進指導の場でした。また昭和11年には屋上に菜園を造り、塾生の日常的な園芸実習の場として使っていました。

アトリエ棟は、鉄筋コンクリート造、建築面積304㎡、地上3階建てで、朝倉自身の設計です。曲面を多用し外観を黒色とする力強いデザインで、特に半円形に張り出した玄関に特徴が表れています。

玄関上方から覗き込む青年像「砲丸」があるのが、屋上菜園です。菜園から降りた2階南テラスの水場は、壁面の豚の口から放水する仕掛けになっています。水

場の奥の温室「蘭の間」は、現在はさまざまな姿の猫を展示する部屋として使われています。

アトリエ棟の約半分を占めるアトリエには《墓守》《大隈重信像》など朝倉の作品が展示されています。アトリエの天井高さは約8.5m、上部に自然採光用のガラス窓を設け、壁には真綿を貼ります。さらに、モーター式昇降台と地下ピット、温水暖房等、当時最新の設備を備えるなど、さまざまな工夫があります。

アトリエには休憩室・ピアノの間・温室・書斎が附属します。書斎は3方の壁を天井までの書架とし、蔵書や収集品を納めます。書斎に繋がる応接室は木造平屋の建物で、構造的には住居棟の西端です。応接室の内装は、壁と天井は数寄屋風、寄木張りの床と窓辺の半円形ソファは洋風で、和洋折衷の造りです。

また、中庭に面したピアノの間の欄間は和風意匠を取り入れ、和風から洋風へと意匠を段階的に切り替えていることが分かります。



朝陽の間 ©朝倉彫塑館

3階座敷と北側階段廻りは住居棟と同じ数寄屋意匠で、特に朝陽の間・次の間は、砕いた瑪瑙を壁材に用いるなど、朝倉の個性が感じられます。3階東面の窓からは中庭が一望でき、ここでも「庭」との一体感が感じられる、優れた空間意匠となっています。

## 台東区立朝倉彫塑館旧アトリエ

国登録有形文化財(建造物)  
平成13年10月12日登録

敷地の東端にある、朝倉彫塑館の中で最も古い大正13年(1924)築の旧アトリエ(非公開)です。木造で、天井高さ3.9m、平面積50㎡程の規模があり、屋根頂上に「浴光」と題された裸婦像を載せます。

平成25年の修理工事の際に、床下からレール跡と地下階段が発見されました。レールは彫刻の移動用で、地下階段は、彫刻を台座に載せて見上げた時の視覚的効果を確認する装置であったと推察されます。朝倉の創意工夫の跡を残す建物です。

## 台東区立朝倉彫塑館東屋

国登録有形文化財（建造物）  
平成 13 年 10 月 12 日登録

朝倉彫塑館の西側、諏訪台通りの表門を入ってすぐ左手に、アトリエ棟玄関に向き合って、木造の東屋があります。五角形平面に、待合風に腰掛を設けた数寄屋風の建物で、勾配の緩い傘状の屋根を載せた一風変わった建物です。



東屋外観 ©朝倉彫塑館

### コラム 朝倉文夫ってどんな人？

朝倉文夫(1883-1964)は、明治から昭和にかけて活躍した彫刻家です。朝倉は明治16年(1883)に大分県大野郡上井田村(現在の豊後大野市)の渡辺家に生まれ、10歳の時に朝倉家の養子になります。19歳のときに上京し、明治40年に東京美術学校彫刻撰科を卒業しました。

卒業と同時に、朝倉は谷中にアトリエと住居を構えます。明治43年には谷中の老墓守をモデルにした《墓守》が文展の最高賞に入選するなど、多くの作品が評価されています。東京美術学校教授や文展の審査員、帝国美術院会員、日展理事などを歴任し、昭和23年(1948)には文化勲章を受章しています。

現在この地に残る新旧アトリエと住居等の建造物や庭園は、朝倉自らが計画・監督し、昭和10年に完成しました。戦争による金属供出で多くの作品は失われましたが、早稲田大学の《大隈重信像》や東京国際フォーラムにある《太田道灌像》などを今も見ることができます。

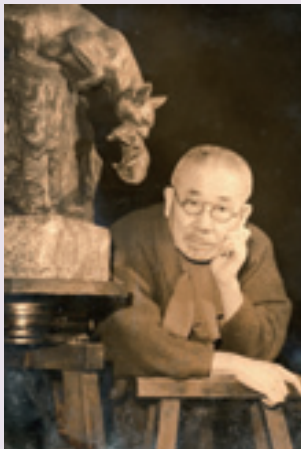
また、谷中といえば「猫」が有名ですが、朝倉も猫を愛し、多くを飼うと同時にその作品も残っています。



朝倉彫塑館 ©朝倉彫塑館



「仔猫の群」 ©朝倉彫塑館



朝倉文夫氏(猫をモチーフとした作品《よく獲たり》とともに) ©朝倉彫塑館

## 延命院のシイ

都指定天然記念物  
昭和5年5月指定

JR日暮里駅北口から西へ向かうと、右手に寶珠山延命院があります。延命院は慶安元年(1648)開山の日蓮宗の寺院で、一説では、八百屋お七の母親がここで祈願をし、お七を授かったともいわれています。

山門をくぐると右手に大きなスタジイがあり、これが「延命院のシイ」です。

スタジイはブナ科に属する常緑高木で、堅果(どんぐり)は、渋みがなく食用となります。

「延命院のシイ」は樹齢が600年を超えとも言われている老木です。高さ16mの巨樹でしたが、平成14年に南側の大枝が崩落してしまいました。それでもなお樹勢を保ち、支柱に支えられながら、南側に枝葉を大きく広げています。

なお、天保7年(1836)開版の『江戸名所図会』  
「日暮里惣図」の右端に、この「延命院のシイ」と思われる樹木が描かれています。古くから、日暮里の街並みの移り変わりを見てきた樹木といえるでしょう。



延命院のシイ

## 天王寺五重塔跡

都指定史跡  
昭和54年3月31日旧跡指定  
平成4年3月30日種別変更

幸田露伴の小説『五重塔』のモデルとして知られる谷中の五重塔は、天台宗の寺院護国山尊重院天王寺の境内(現在の谷中霊園内)に立っていました。天王寺は、もとは日蓮宗で長耀山感應寺尊重院と称し、道灌山の関小次郎長耀と日蓮とのゆかりによって建立された古刹です。元禄12年(1699)幕命により天台宗に改宗し、その後天保4年(1833)に現在の護国山天王寺と改称しました。

最初の五重塔は、寛永21年(正保元年(1644))に建立されましたが、130年ほど後の明和9年(安永元年(1772))目黒行人坂の大火で焼失しました。罹災

から19年後の寛政3年(1791)に再建された五重塔は、震災・戦災をくぐり抜け、長く谷中のランドマークになっていました。『五重塔』のモデルになったのもこの塔ですが、昭和32年(1957)7月6日、残念ながら放火により焼失し、現在はその基礎部分のみが残されています。

焼失前の塔は総檜造りで、高さ11丈2尺8寸(34.18m)。関東で一番高い塔でした。幸い建築家大高益株による明治3年(1870)の実測図が残っており、往時のその姿を知ることができます。

現存する方3尺(約90cm四方)の中心礎石や四本柱礎石など総数49個の石材はすべて花崗岩です。中心礎石から釜銅谷利容器や銅経筒、四本柱礎石と外陣四隅柱からは銅経筒などが発見されています。



焼失前の天王寺五重塔全景

## 子規庵

都指定史跡  
昭和27年11月3日標識  
昭和30年3月28日旧跡指定  
昭和35年4月1日種別変更

正岡子規(1883 - 1902)は、わずか35年の生涯の中で近代文学史上に大きな足跡を残した、明治を代表する文豪のひとりです。現在の松山に生まれ、進学のため上京後、文学の道に進みました。俳句、短歌の革新に取り組み、事実をありのままに写すという俳句の手法を散文に活かした「写生文」を提唱するなど、多くの作家に影響を与えたほか、随筆家としても優れた作品を残しています。

子規庵は、子規が家族とともに明治27年(1894)から晩年を過ごした場所で、加賀藩前田家の下屋敷の御家人用二軒長屋でした。大学予備門以来の友人である夏目漱石を始め、多くの文人たちがここを訪れました。雑誌『ホトトギス』の発刊や、代表的な随筆集『病牀六尺』や日記『仰臥漫録』などはここで書かれました。子規は狭いながらも庭の草木を愛し、その光景を作品の中に多く書き残しています。

昭和20年(1945)の戦災で家屋は失われましたが、門人の寒川鼠骨らの尽力により、5年後に子規の過ごした長屋の一部がほぼそのままの間取りで再建されています。



子規庵

### コラム 正岡子規について

子規は晩年結核に冒されて長く病床にあり、俳句・和歌など古風な文人の印象が強いですが、一方で大いに野球を愛した人物として知られています。当時の野球はアメリカから伝わった目新しいスポーツですが、子規は非常にこれを楽しみ、東大予備門時代からこれに熱中したといわれています。子規が自分の本名である升(のぼる)をもじって「野球(のぼる)」と号した逸話は有名です。俳句や短歌にも野球を多く取り上げ、新聞にルールを連載紹介したこともあったようです(『松蘿玉液』所収)。このような野球の普及への多大な貢献から、平成14年(2002)には特別表彰として野球殿堂に殿堂入りし、大きな話題となりました。かつて子規が野球を楽しんだといわれる上野公園内には、平成18年の開園130周年の折、「正岡子規記念球場」の愛称が付けられた野球場があります。



正岡子規横顔

## 中村不折旧宅 (書道博物館)

都指定史跡  
昭和27年11月3日標識  
昭和30年3月28日旧跡指定  
昭和35年4月1日種別変更及び名称変更

明治・大正期に活躍した洋画家・書家<sup>なかむら ねり</sup>中村不折(1866-1943)が、昭和11年(1936)に居宅のかたわらに建てたのが書道博物館です。

不折は江戸(東京)生まれ。長野で育ち、上京して浅井忠や小山正太郎に師事しました。4年間のフランス留学の後、太平洋画会の中心として、白馬会(びまかい)の黒田清輝らに対抗しました。長く近代洋画界の実力者として、帝国美術院会員、太平洋美術学校校長となっています。油彩画のほか、鳥崎藤村(『若菜集』)や夏目漱石(『吾輩は猫である』)らの作品の挿絵や雑誌『ホトトギス』の表紙などでも知られています。一方で書家であり、書のコレクターとしても知られています。



『ホトトギス』表紙 © 書道博物館

書道博物館は不折が独力で収集した、中国・日本の書に関する古美術品や考古資料を中心に、重要文化財12点、重要美術品5点を含む約16,000点を収めています。

第二次世界大戦の戦災を免れ、昭和初期の趣を残す本館は、近代洋風建築としても貴重です。平成11年(1999)に建てられた中村不折記念館では年数回の特別展・企画展が開催されるほか、館内の中村不折記念室には不折の作品や関係資料が展示されています。

当地にあった不折の居宅は戦災で失われてしまいましたが、敷地内には大正時代の蔵が残るほか、不折が明治時代に建てた石造りの土蔵が庭園内に移築、公開されています。



『吾輩は猫である』挿絵 © 書道博物館



書道博物館 外観 © 書道博物館

